

TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の

Funky Corner

文・撮影●波多利朗 text and photo by Hata Toshiro

(URL) <http://www.funkygoods.com/>(E-Mail) catty@mxp.mesh.ne.jp

なにをいまさら 「HP95LX」

今号の前フリ

をを！何と言うことだ！！前フリに命をかける色物記事ライターであるところの筆者としては極めて異例なことに、今号はいつになく真面目に本文を執筆してしまったものだから、前フリを書くスペースが無くなってしまったじゃないか！！

いかん、こんなことじゃいかん！毎号前フリページを少しずつ増やし、しまいにはこのコーナー全体を前フリにしておもうという筆者の崇高な陰謀が達成できなくなってしまおう！「世界征服の基礎はまず練馬から」を合言葉に肅々と進行させてきた筆者の悪巧みを、自ら覆してしまっとうする！そういえば究極超人あ～るは、実に面白いコミックスだった。ゆうきまさみ先生空前絶後の傑作であろう。あ、また脱線した。しかもノリが少々濃い。そうそう、このノリこそ、世界的な不況の中に置かれた日本が活路を見出すために必要なものなのだ！！

で、今回の前フリは何を予定していたかということ、実は真空管式ラジオ受信機だったりするのである。それも、ダルマ管と呼ばれるST管を使用し、木製の筐体に入ってAM放送しか受信できないようなラジオだ。

マニアの方ならもうお馴染みの5球スーパーヘテロダイ、こいつにマジックアイと呼ばれる同調指示管（6E5とか言ったほうが早く通じるかも）を加えた構成のラジオは、実に多数のメーカが続々と製品を送り出した。そもそもAMラジオという、極めて単機能の商品に付加価値を付けるとするならば、もうそれはデザインしか余地

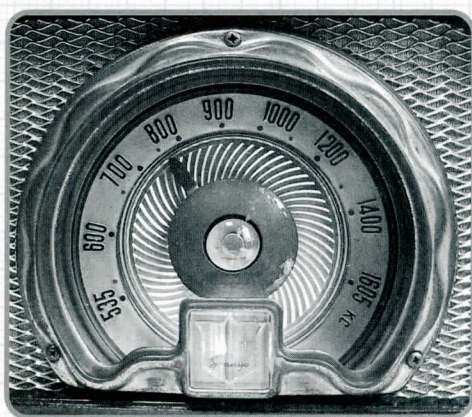
が残されていない。というわけで、当時の木製筐体の大型ラジオには、奇抜なものから無駄としか思えないものまで、実に様々なデザインのラジオが発売されていた。とくに同調パネル部分は各社ともデザインに凝りまくっており、見ていても飽きが来ない。筆者などは同調パネル部分のみをデジカメで撮影し、オリジナル絵葉書にしちゃってコーフンしてたくらいである。ちなみにこの絵葉書は濃いマニア向けに結構売れるのではないかと内心期待しているのであるが、いかがなものであろう？って変なところで商売っ気を起こすもんじゃないな……(A B C D)。

それはそうと、今のパソコンも当時のAMラジオも考えてみれば同じようなもので、ハコの中身の構成はメーカに寄らずどれも似たり寄ったり。で、差別化できるところと言えば、せいぜいビデオカードとCPUくらい。これでは金太郎飴パソコンと言われてもしょうがないね。少しでも個性を出すべく、色々デザインされたパソコンケースが、こだわりを持つ自作派向けとして販売されているのだが、どれもデザイン的には今ひとつといった感が無きにしもあらずなのだ、これが……。

というわけで、アールデコ調のパソコンとか、無駄に電球やニキシー管やメータ類やLEDを取り付けたパソコン等がもっと出てくると面白いと思う波多利朗なのであった……って結局しっかり前フリ書いてちゃったりしてど～する。^o^;;

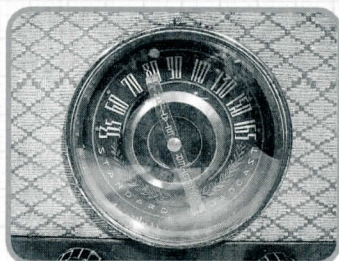
波多利朗とHPLXシリーズ

某物故ムックのタイトルを真似て言うならば「なにを



㊦SANYO製

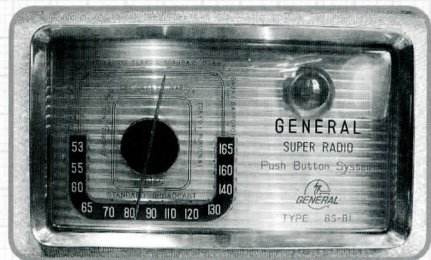
筆者コレクションの中でもダントツのデザインを見せるSANYO製スーパーラジオの同調部。中心にマジックアイを配置するところなど、他に類例を見ない斬新さだ！



㊦NISSAN製

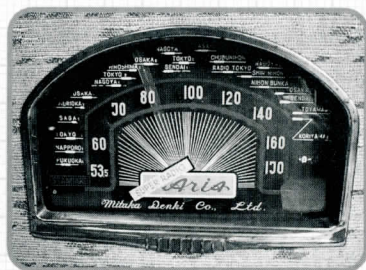
まさか自動車メーカーが作ったラジオではあるまいが…。メーカー名にNISSANの銘が入ったスーパーラジオ。丸い同調部と周波数を示す数字のロゴが、60年代のアメ車のスピードメータのようだ

スーパーラジオ の同調パネル



㊦GENERAL製

ラジオメーカーとしては有名だったGENERAL。これは同社が発売したゼニスタイプの同調ボタンを持つラジオの同調パネルである。このラジオでは、同調は通常のダイヤルのほかにプッシュボタンでも行える



㊦ミタカ電気製

ミタカ電気がAriaブランドで発売したラジオの同調パネル。オーソドックスなタイプであるが、文字のロゴと配色が秀抜。カラーでお見せできないのが残念

いまさらHPLX」ってな感じになるのだろうか。とくに本誌のような濃い読者の多いオタク雑誌ではなおさらであろう。それほどまでにHPのバームトップパソコンは、DOSベースの代表的な携帯端末として非常に多くのユーザーに認知されている。

実は今号のテーマを考える際に、HP95LXを取り上げようかどうしようか迷ったんだよね。HPLXシリーズについては、既に多くの優れた書籍が出版されているし、雑誌に掲載されたことも多い。今更ながら筆者のようなイロモノ記事ライターが採り上げるとするのも、なんだか気が引けてしまう。

しかし、波多利朗とて人の子、DOSベースのバームトップ機の代表格を無視して本連載を続けるわけにもいかんだろう。というわけで今回は、僭越ながら取ってこの名機を取り上げようと考えた次第である。

さて、筆者とHPLXシリーズとの関わりであるが、筆者が最初に触れたHPLXシリーズは、実は100LXであった。95LXが発売された当時、非常に興味を持ったのであるが、財政的な理由により購入することができなかったのである。ちなみにPsionの日本語エディタの作者であり、世捨て人兼廃人である「柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏」は、1MB版HP95LXが発売されてすぐに新宿NSビルで開催されたHPフェア会場まで、HP95LXを買いに行ったという過去を持つ。その氏から後日日本語が表示されたHP95LXを見せてもらい、猛然と欲しくなったというワケだ。

ちょうどその頃、日本でもHP100LXが発売になった。CPUが強化され、液晶画面も馴染み深いCGAが採用されたことにより、筆者は迷わずHP100LXを購入する。購入場所はモチロン、HPLXの聖地、新宿紀伊国屋アドホ

ック店である。その後、同店にて200LXをも購入し、実は今でもメインマシンとして使っていたりする。

さて、1997年のことであるが、携帯端末関連の単行本を執筆していた時に、筆者はHP95LXが我がコレクションに欠けていることに気が付いた。これはいかん、大変だというわけで、あわてて米国より入手したのである。

こうして入手したHP95LX、1回日本語環境を構築できたまでは良かったが、その後長らく押し入れに放置しておいたため、メインバッテリー、バックアップバッテリーはおろかSRAMカードのバッテリーまでスカラカンに抜けてしまい、これ以上ないくらい死んでしまった。復活させようとしたのだが、なにぶん昔のこととてすっかり方法を忘れてしまっている……。悪戦苦闘の末、ようやく元通りに戻ったのであるが、やはり使わない技術は忘れてしまうものだね。

もし読者の中で筆者と同様のHP95LXをお持ちの方がおられれば、この記事を参考に復活して頂ければ幸いです。

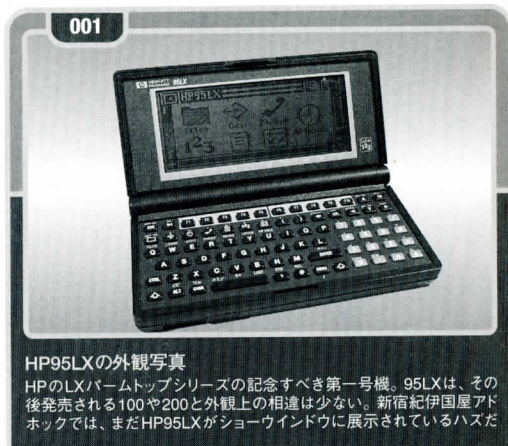
HPのパームトップファミリ

1991年5月に発売されたHP95LXは、HPの一連のパームトップパソコンシリーズの記念すべき最初の製品である。HP95LXは、CPUにNECのV20を採用し、IBM PC互換アーキテクチャを持った画期的な携帯端末であった。ちなみに「LX」の意味であるが、「L」は本体に内蔵ROMにLotus1-2-3を内蔵していたことに起因する。また「X」は「eXpandable」を意味し、メモリなどが拡張可能であったことを表していた (001)。

HP95LXは、OSにMS-DOS Ver3.22をROMで内蔵していた。もちろん、このままでは日本語を取り扱うことはできないが、当時のパワーユーザの手によるフリーソフトのおかげで、日本語によるテキスト入力が可能となる。これにより、手のひらでサイズで日本語のメモが取れるマシンとして、日本でも非常に話題となった。

HP95LXはIBM PC互換アーキテクチャを採用していたが、液晶画面は240×128ドットのMDA (モノクロ・ディスプレイ・アダプタ) 互換であった。従って画面表示も基本的にはキャラクタベースのものであった。

その後、1993年に上位機種である100LXが登場する。100LXでは、液晶画面に640×200ドットのCGAを採用し、グラフィック表示にも互換性が確保され、いわゆる市販されているIBM PC互換機用のソフトウェアが動作



HP95LXの外観写真

HPのLXパームトップシリーズの記念すべき第一号機。95LXは、その後発売される100や200と外観上の相違は少ない。新宿紀伊国屋アドホックでは、まだHP95LXがショーウィンドウに展示されているハズだ

するようになる。またCPUにも80186を搭載し、PCカードもPCMCIA Ver2.0となった。この恩恵は大きく、95LXではSRAMカードのみであったPCカードが、100LXではフラッシュメモリやモデムカード等、さまざまな種類のカードが使用できるようになったのである。内蔵メモリも1MBのほかに2MBの製品が用意され、内蔵PIMも大幅に強化された。

さて、100LX発売の翌年である1994年には、早くも100LXをバージョンアップした200LXが登場する。200LXは、仕様のにはほぼ100LXと同等で、内蔵アプリケーションが強化されたモデルである。具体的には、Pocket Quickenと呼ばれる財務会計ソフトが追加になったくらいで、そのほかは筐体の色以外、目立った違いはない。内蔵メモリは、1MB、2MB、4MBがラインナップされた。

ここまでのラインナップは良く知られているが、HPのパームトップパソコンシリーズの中には1000CXと呼ばれる機種もある。これは100LXをベースとしたマシンであるが、HPLXシリーズの特徴である内蔵PIMソフトウェアを全部取り払ったという、正真正銘のピュアなDOSマシンである。HPのパームトップの特徴となっていたキーボード上部のアプリケーションボタンが、このマシンでは大胆にも省略されている。考えてみれば、HPLXの大きな特徴ともなっていた内蔵PIMをバッサリとなくすとは、随分思い切ったことをするものだ。なお、内蔵メモリは1MBであった (002)。

次に、各マシンの仕様を示す。

●HP95LX

モデル名称	HP 95LX
メーカー	HEWLETT PACKARD
CPU	V20H (80C88相当) 5.37MHz
搭載メモリ容量	ROM: 1MB、RAM: 1MB/512KB
ディスプレイ	240×128dot LCD (MDA互換) (アクティブエリア 110mm×45mm)
キーボード	QWERTY 80キー・キーボード(テンキー付き)
I/Oポート	RS-232Cシリアルインターフェース(コネクタ形状は1列4ピンの独自仕様、最大通信速度は115.2kbps)
バッテリー	メインバッテリー 単三乾電池2本 サブバッテリー リチウムボタン電池1個(CR2032使用)
PCMCIA	PCMCIA Ver 1.0 (JEIDA Ver 4.0) 1基搭載(最大2MBまでのSRAMメモリカードが使用可能)
大きさ	160mm (W) × 86mm (D) × 25mm (H)
本体重量	300g (乾電池を含む)
OS	MS-DOS Ver 3.22 ROM版
内蔵ソフトウェア	Filer、Communication、PhoneBook、Lotus 1-2-3、Memo、Calc、AppointBook
ACアダプタ	別売り

●HP200LX

HP200LXの仕様は、基本的に100LXと同一である。ただし、搭載しているROM容量が2MBから3MBに拡張されており、また内蔵ソフトウェアにも機能強化が図られている。RAM容量は2MB版と4MB版があった。

●HP1000CX

HP1000CXの仕様は、基本的に100LXと同一である。ただし、100LXに内蔵されているソフトウェアは、1000CXでは搭載されていない。

🌀 HP95LXの外観

次にHP95LXの外観を見てみよう。ここでは現在でも多くのユーザが使用しているHP200LXと比較してみることにする。



歴代HPパームトップシリーズの揃い踏み

左から95、100、200、1000。200のみ筐体の色が異なるが、その他はどれもほぼ同じ形状である。1000CXは内蔵PIMを一切持たない変り種。結構レアなモデルであると言える

●HP100LX

モデル名称	HP 100LX
メーカー	HEWLETT PACKARD
CPU	80C186 7.91 MHz
搭載メモリ容量	ROM: 2MB、RAM: 1MB/512 KB
ディスプレイ	640×200dot CGA LCD (アクティブエリア 110mm×45mm)
キーボード	QWERTY 80キー・キーボード(テンキー付き)
I/Oポート	RS-232Cシリアルインターフェース、赤外線インターフェース(コネクタ形状は2列10ピンの独自仕様、最大通信速度は115.2kbps)
バッテリー	メインバッテリー 単三乾電池2本 サブバッテリー リチウムボタン電池1個(CR2032使用)
PCMCIA	PCMCIA Ver 2.0 1基搭載
大きさ	160mm (W) × 86mm (D) × 25mm (H)
本体重量	312g (乾電池を含む)
OS	MS-DOS Ver 5.00 ROM版
内蔵ソフトウェア	Appointment Book(スケジュール管理ソフト)、cc:Mail(メールソフト)、Database(カード型データベース)、Datacomm(通信ソフト)、Filer(ファイル管理ソフト)、HP Financial Calculator(金融電卓)、Lotus 1-2-3 R.2.4(表計算ソフト)、Memo Editor(簡易エディタ)、Note Taker(テキストデータベース)、Phone Book(電話帳)、Stopwatch(ストップウォッチ)、World Time(世界時計)
ACアダプタ	別売り

まず一番目に付く相違は筐体の色である。HP95LX、100LXは黒であったが、200LXは青緑色(とでも言うのであろうか?)というちょっと変わった色を採用していた。

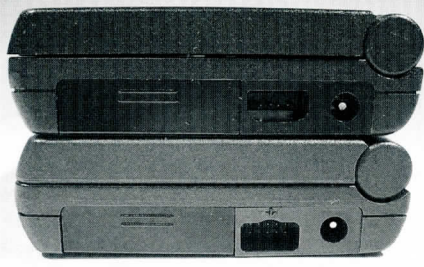
HP95LXの上部のエンブレムには、Hewlett-PackardのロゴとHEWLETT PACKARDの文字が入るが、200LXにはこれに加えて200LXの文字も入り、エンブレム自体もかなり大きくなっている。また、本体上部の波模様であ



HP95LXと200LXのケース上部

モノクロでわかりづらいが、色が異なるほかに、エンブレムの大きさとケースに穿たれた溝の本数が異なっている。このように両者の造形には細かい相違がある

004



インターフェース端子の形状の相違

HP95LXでは1列4ピンの構成となっているが、200LXでは2列10ピンの構成となっている。インターフェースケーブルには変換コネクタが付属しており、95でも200でも両方使うことができる

るが、95LXが11本であるのに対し、200LXでは15本となっている（ってそんなところまで数えるなよ>俺!）(003)。

構造上の相違は本体右側に配置されているPCとのインターフェースコネクタであり、95LXの場合は4ピン1列の配置となっているが、200LXでは10ピン2列の仕様となっている。そのほかには、外観上の相違はほとんどない。ちなみに筆者が所有する95LXはMADE IN USAであるが、200LXはMADE IN SINGAPOLEであった (004)。

キーボードを見ると、内蔵アプリケーションの違いからキー配置が微妙に異なっている。しかし、全体的なキーのレイアウトはほとんど同じだ。液晶周りの表示は、200LXのほうが若干派手になっている (005、006)。

このように細かな違いはあるが、95LXと200LXとは同

じファミリの製品であることが実感できる。

御三家ソフトの導入

HP95LX上で日本語環境を構築するアプリケーションソフトウェアとしては、JMEMO、KDISP95そしてFEPが有名である。これら御三家ソフトをインストールすることで、英語環境のHP95LXをあたかも日本語環境にローカライズしたかのように使うことができる。

まだ謎ば〜機なるものの定義すらされていなかった1991年当時、このような非力なマシン上で漢字を表示させたという事実は、実に驚くべきことである。そこで今回は当時を偲ぶ意味も込め、これら御三家ソフトの導入方法について簡単に述べてみたい。

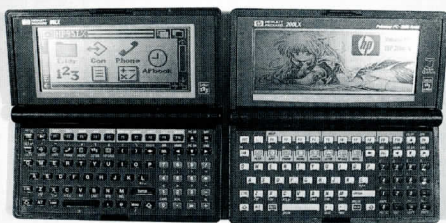
今回、HP95LXに2MBのSRAMメモリカードを搭載した環境で、各種ソフトウェアを導入した。SRAMカードは、たまたま手元にあったNEC製の2MB SRAMカード(型番：N6919-93K)を使用した。基本的にType 1のSRAMカードであれば認識してくれるはずである。

95LXでは、1MBの内蔵メモリをRAMディスクとシステムRAMとで割り振って使用する。今回は、RAMディスクを518KB、システムメモリを506KBに設定してある。

518KBに設定した内蔵RAMディスクはCドライブにアサインされる。このドライブにはVzエディタ、各種ツール類、漢字ディスプレイドライバであるKDISP.SYS等を格納する。またCドライブのルートディレクトリには、CONFIG.SYSファイルを作成する。

2MBのSRAMカードはAドライブとして認識される。ここには日本語エディタであるJMEMO.EXMや日本語入

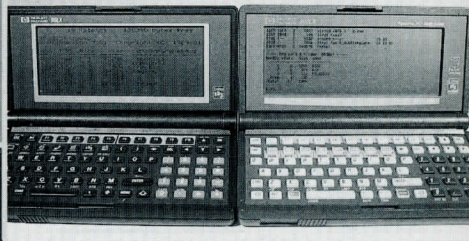
005



HP95LXと200LXのキーボード

写真左が95、右が200のキーボード。内蔵アプリケーションの違いからキー配置は微妙に異なる

006



HP95LXと200LXの液晶パネル

MDA互換の95LXと比較して、CGA互換の200LXの液晶画面は非常に解像度が高い。しかし、文字等は細かすぎて、年寄りには辛い仕様になってしまったのは事実である。液晶周りのパネルは、200LXのほうが若干派手だ

カプログラムであるFEP.EXM、また辞書やフォントファイルなどを格納する。またAドライブのルートディレクトリにはautoexec.batファイルを作成する。

1. JMEMOの導入

JMEMOは、HP95LX上で日本語処理が可能となるエディタプログラムであり、mani氏が制作しかづひ氏が発展させたものである。シスマネからホットキーで起動することが可能であり、メモを取る程度の用途には十分使うことができる。95LXが日本でブレイクしたのも、このJMEMOのおかげであろう。以下に、JMEMOの導入方法を簡単に示す。

(1) 必要となるファイルを格納する

JMEMOは日本語エディタプログラムなので、本体のほかにフォントファイルや辞書ファイルが必要となる。以下に必要なファイルとその格納場所を示す。辞書やフォントファイルは容量が大きいので、SRAMカード（Aドライブ）内に入れることにする。これらのファイルは、@niftyのFHPPC等で入手可能だ。なお、今回はフォントファイルとしてfont.9を使用した。8ドットフォントには有名な恵梨沙フォントがあり、もちろん使用可能である。

```
* A:¥JMEMO
  JMEMO.EXM

* A:¥SYS
  FONT.14
  FONT.9
  FONT.TBL
  JISYO.DIC
  JISYO.IDX

* C:¥_DAT
  JMEMO.HLP
  JMEMO.ENV
```

さらに、Aドライブにデータ格納用ディレクトリ [DATA] を作成しておく。

※font.9はfont.14をコンバートして作成する。この変換作業には、KDIAP、JMEMO用8ドットフォント作成プログラム「MAKEFONT.EXE」を用いる。

(2) JMEMO.ENVを設定する

次にCドライブの_datディレクトリ中に格納したJMEMO.ENVファイルを編集する。(1)で示したディレクトリ構成でファイルを格納した場合には、JMEMO.

ENVの表記は下記ようになる。

[JMEMO.ENVの内容]

```
a:¥sys¥font.tbl
a:¥sys¥font.9
a:¥sys¥font.14
a:¥sys¥jisyo.idx
a:¥sys¥jisyo.dic
a:¥data
0
0
1
64
```

(3) APNAME.LSTを設定する

今回はJMEMOをAドライブにインストールしたので、AドライブのルートディレクトリにAPNAME.LSTを下記内容で作成する。

[APNAME.LSTの内容]

```
A:¥JMEMO¥JMEMO.EXM, BB00, JMEMO
```

この指定内容の意味であるが、

- A:¥JMEMO¥JMEMO.EXMが起動するプログラム名称
- BB00がJMEMOを起動させるために使用するホットキーの指定（上記の指定では、ALT+MEMOキーに設定される）
- JMEMOがプログラム識別名

となっている。

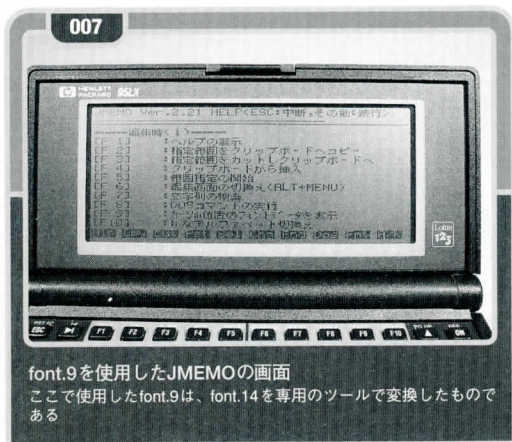
(4) JMEMOを使う

以上でインストールは終了し、再起動をかければJMEMOが使えるようになる。使用方法は簡単で、シスマネが起動している状態でALTキーとMEMOキーを押すだけでよい。エディタが起動するので、ローマ字入力単文節変換による文字入力力で日本語を打ち込んでゆく。なお、変換キーはスペースとなっている。

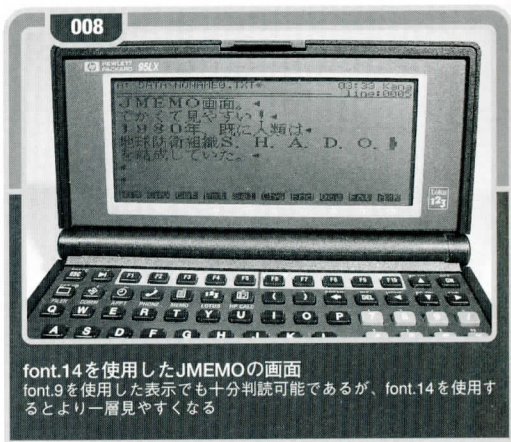
MENUキーを押すことでファイルのオープン、セーブ、新規作成の処理や、表示フォントの8ドット/14ドット変換などの指定が行える（007、008）。

2. KDISP95の導入

HP95LXの内蔵ROMには優れたアプリケーションプログラムがインストールされているが、当然のことながらこ



font.9を使用したJMEMOの画面
ここで使用したfont.9は、font.14を専用のツールで変換したものである



font.14を使用したJMEMOの画面
font.9を使用した表示でも十分判読可能であるが、font.14を使用するとより一層見やすくなる

れらは英語しか表示することができない。そこで、内蔵アプリでも日本語を表示させるためのドライバソフトKDISP95が開発された。PhonebookやLotus1-2-3で漢字が表示されるのを見るのは、ちょっとした感動モノだ。以下にKDISP95の導入方法を簡単に示す。

ッセージが表示されて使用可能となる。なお、KDISP95.SYSを使用する場合には、ドライバを組み込んでから10秒以内にシスマネを起動させる必要がある。

(1) 必要となるファイルを格納する

KDISP95は、日本語表示にJMEMOで使用するフォントファイルを用いる。フォントファイルは、CドライブもしくはAドライブのSYSディレクトリに入れておけば良い。今回はfont.9をA:\SYSディレクトリに格納した。またKDISP95.SYS本体は、C:\SYSディレクトリにコピーした。

```
* C:\SYS
KDISP95.SYS
```

```
* A:\SYS
font.9
```

(2) config.sysを編集する

次に、config.sysファイルに、KDISP95.SYSを登録する。この際注意することは、必ずconfig.sysの最後の行に追加することである。なお、KDISP95.SYSをCドライブにコピーした場合にはCドライブ上のconfig.sysを、またAドライブにコピーした場合にはAドライブ上のconfig.sysを編集する。記述例は下記のとおり。

```
DEVICE=C:\SYS\KDISP95.SYS
```

あとはHP95LXを再起動させれば、ドライバの常駐メ

(3) KDISP95を使う

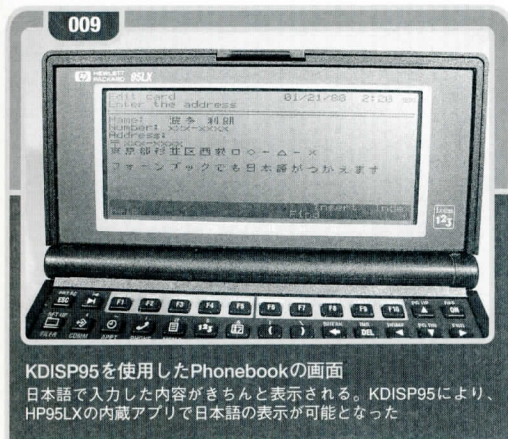
正常にインストールされているかどうかを確認するには、まず内蔵アプリのファイラで漢字が入ったテキストファイルを閲覧してみる。当然、内容はバケバケになって表示されるはずだ。ここでCTRL+*キーを押すとKDISP95がONとなり正常に漢字が表示される。再度CTRL+*を押せばOFFとなり、元の状態に戻る。次に述べる日本語入力プログラムFEP.EXMと併用すれば、内蔵アプリで日本語を取り扱うことができ、大変便利である。なお、HP95LXのシスマネを使用せず、DOSモードのみで使用する場合には、KDISP95は組み込まないようにする(009、010)。

3. FEPの導入

FEP.EXMは、HP95LXのシスマネやEXM形式のアプリケーションプログラムで日本語を入力するためのプログラムである。これを使用すると、HP95LXの内蔵プログラム、たとえばPhonebook等で日本語を入力することが可能となる。英語環境を前提として作られたマシンでここまでできれば言うことなしであろう。以下にFEP.EXMの導入方法を簡単に述べる。

(1) 必要となるファイルを格納する

まず最初にFEP.EXMは日本語表示にKDISP95.SYSを使用するので、KDISP95が正しくインストールされてい



009
 KDISP95を使用したPhonebookの画面
 日本語で入力した内容がきちんと表示される。KDISP95により、HP95LXの内蔵アプリで日本語の表示が可能となった



010
 KDISP95をOFFとした画面
 写真009の状態でもKDISP95をOFFとしてみた。CTRL+*キーで簡単にOFFとすることができる。OFFにすると、まるで宇宙人が使っているPIMのように文字化けを起こす(当然だな)

ることが前提となる。

FEP.EXMはCもしくはAドライブに入れることが可能だ。ここではAドライブに入れた場合について述べる。AドライブのSYSディレクトリにFEP.EXM本体をコピーする。

*A:¥SYS
 FEP.EXM

(2) APNAME.LSTを設定する

既にJMEMOをAドライブにインストールしているの、AドライブのルートディレクトリにはAPNAME.LSTが格納されているはずである。このファイルにFEP.EXMをホットキーで起動するための設定を追加する。JMEMOの設定も含めたAPNAME.LSTの内容は、下記のとおり。

[APNAME.LSTの内容]

A:¥JMEMO¥JMEMO.EXM, B000, JMEMO ←JMEMOの設定
 A:¥SYS¥FEP.EXM, CA00, FEP ←FEPの設定

この指定内容の意味であるが、

- ・A:¥SYS¥FEP.EXMが起動するプログラム名称
- ・CA00がFEPを起動させるために使用するホットキーの指定(上記の指定では、CTRL+MENUキーに設定される)
- ・FEPがプログラム識別名

となっている。

なお、FEP.EXMはJMEMOの環境設定ファイルである

JMEMO.ENVを参照して、辞書ファイルを使用する。従って、C:_DATディレクトリ中に格納したJMEMO.ENVファイルが正しく設定されていることが必要である。

(3) FEPを使う

シスマネ上で、たとえばMEMOを開く。ホットキーに指定したCTRL+MENUを押すと、画面下の2行の表示が変わる。この状態でローマ字入力で文字を入れスペースキーを押すと、最下行に漢字に変換された文字が表示される。確定であればリターンキーを押す。すると入力した文字が、今度は1行上に表示される。FEPでは、画面最下行が変換エリア、その1行上が表示エリアとなっているのである。表示エリアに表示された確定文字は、リターンキーを押すことでMEMOに入力される。FEPを



011
 FEPを使ってMEMO上で日本語を入力している画面
 FEPを起動すると、画面下の2行が変換エリアおよび表示エリアとして確保される。FEPはシスマネ上でCTRL+MENUキーを押すことで起動する

終了するには、ESCキーを押せばよい。すると画面下の2行は元の状態に戻る (011)。

と、ここまで書いたところで、残念ながら紙面が尽きた。実はHP95LXには「Drive95」と呼ばれる専用の外付けのフロッピーディスクドライブがあった。また、元々HP製電卓用として作られた赤外線プリンタ「HP82240B」も、HP95LXに接続することができる。これら周辺機器の接続については、次回のお楽しみということにしよう。

おわりに

久しぶりにHP95LXを復活させて感じたのは、やはりDOS/V初期のあの熱狂である。情報的にもハードウェア的にも、まだ全く準備が整っていなかった当時、これだけ限られたハードウェアリソースのマシンで日本語入力まで可能にしてしまったユーザのパワーたるや、半端なものじゃない。またHP95LX自体についても、さすがにその後のベストセラー携帯端末の初代機だけあり、非常に良くできていると再認識した次第である。筆者の個人的な事情だが、老眼が進んだ眼にHP200LXのCGA画面は細かすぎて非常に辛い。それに対してHP95LXは、文字の大きさが丁度良く、あながち古いマシンだからダメだと決め付けるわけにはいかない。さらに、HP95LX上での日本語環境構築作業は、日本におけるバームトッパパソコンの歴史そのものを辿るものと言えなくもない。DOSコマンドライン時代全盛期のユーザ、すなわち

```
xcopy c:\a:\ /s /e /v
```

とか

```
lha a -x1 -r2 temp.lzh temp
```

といったタイピングを何の苦もなく打ち込んでパソコンを使っていたお方は、是非この機会に再び当時の苦勞を味わって頂きたいものである。合掌!!!

参考

最後に、筆者のHP95LXのconfig.sysファイルとautoexec.batファイルをご参考までに掲載しておく。あくまでご参考なので、細かいツッコミはなしよ……^O^;;

* config.sys ファイル

(Cドライブのルートディレクトリ上に設定する)

```
FILES=20
BUFFERS=20
DEVICE=C:\TOOLS\YANS13.SYS
shell=c:\command.com /P /E:512
DEVICE=C:\YSYS\KD1SP95.SYS (←KD1SP95を使用する場合に記載)
DEVICE=C:\DRIVE95.SYS (←DRIVE95を使用する場合に記載)
```

* autoexec.bat ファイル

(Aドライブのルートディレクトリ上に設定する)

```
echo off
prompt [DOS]$p$g
path c:\;%c:\%_dat;%c:\%vz;%c:\%tools;%c:\%bat;%a:\%;
set edit=vz
c:\%tools%\irprtsc (←HP82240Bを使用する場合に記載)
c:
a:\%sndpla%\snd.exe a:\%sndpla%\winstart.snd (※1)
cls
echo *****
echo Press Ctrl+C to enter DOS
echo Press Any Key to enter SYSMGR
echo *****
pause>nul

prompt [SYS]$p$g
a:\%sndpla%\snd.exe a:\%sndpla%\anvil.snd (※1)
$ssysmgr
```

(※1) snd.exeは、HP95LXのスピーカを使用して[snd]ファイルを再生するためのフリーソフト。別に無くても動作上全く問題はない。

